



Success Story

株式会社千趣会 | ER/Studio



データベース管理業務の工数を大幅に削減



株式会社千趣会のベルメゾン事業は、多彩なアイテムを多種多様なチャンネルで販売しており、年間購買者は約 363 万人。現在、発行しているカタログは 18 種類で一年間に約 6,568 万部に達する。そのカタログ販売を上回るのが EC 販売である。

その歴史は意外に古く、2000 年にはいち早くオンラインショッピングサイト「ベルメゾンネット」を立ち上げた。

単なるオンラインカタログではなく、カタログにはない着用画像や動画を掲載するなど、ネット特性を活かした同社の最大チャンネルである。また、現在はスマートフォンでのアクセスが増え、PC サイトとは異なるスマートフォンならではのユーザービリティを追求している。

また、千趣会のオリジナル商品は、amazon や Yahoo!ショッピングでも商品を販売している。そんな同社の通信販売ビジネスに IT は欠かせない。

通信販売ビジネスの要は「フルフィルメント」である。フルフィルメントとは、商品の受注、梱包、発送、決済に至るまでの一連の業務プロセスのことで、その範囲には、在庫管理、顧客管理、入金管理なども含む。

同社のフルフィルメント・システムは、それぞれの業務がシステム化されており、複数のシステムが連携して稼働している。

先に述べたように、同社は自社の通信販売ビジネス以外に、大手ショッピングサイトの amazon や Yahoo!ショッピングでも商品を販売している。そのため、フルフィルメント・システムで扱うデータは、自社のオンラインショッピングサイト「ベルメゾンネット」とコールセンター経由の受注分だけではなく、社外の EC サイトから届く販売データも含まれる。



株式会社千趣会
経営企画本部情報システム部
システム管理チーム 田中 創一郎氏

ウーマン スマイル カンパニー

senshukai



ER/Studio

会社名

株式会社千趣会

業種

小売業

事業内容

通信販売

ツール

ER/Studio Data Architect

課題

- データソースの多様化に対して、データ定義の整合性と一貫性を保つことが必要だが、困難かつ労力がかかる

解決策

- DDL の自動生成により、データベース管理業務の工数削減を達成した

ER/Studio 販売代理店

富士通エンジニアリングテクノロジー株式会社



DDLの自動生成により、データベース管理業務の工数を大幅に削減

このように扱うデータソースが多様化する中、サブシステムの開発がいくつもあり、それらのサブシステムでも、データ定義の整合性と一貫性を保たねばならない。

なぜならば、カラム名やデータ型、サイズ等が異なると、システム間のデータの整合性が損なわれるからである。

しかし、これを属人的に行うのは困難かつ大変労力のかかる作業となる。多様化するデータソースに効率的かつ確実に対応していくために、ER/Studioを採用することになった。

ER/Studioの採用により、サブシステムの開発時に、DDL（Data Definition Language、データ定義言語）を自動生成でき、データベース管理業務の工数削減を達成できた。

ER図作成をルーチンタスク化

株式会社千趣会経営企画本部情報システム部システム管理チームの田中創一郎氏は「ER図が陳腐化している、もしくはそもそも作成されないことでデータ構造の可視化ができていませんでした」と振り返った。

ER/Studioを導入したのは2010年。大規模な基幹システムの開発が一段落したタイミングで、システム開発に伴う成果物の定義を見直し、成果物にER図を含めるルールを決めた。

情報システム部は外部の協力会社の関係者を含めると200人強の大所帯である。



株式会社千趣会経営企画本部情報システム部 部長代理 中島 健氏（左）、
経営企画本部情報システム部システム管理チーム 田中 創一郎氏（右）

すべての関係者が同じ基準のER図を作成できるようにするため、社内向けのガイドラインを作成し、ER図の作成手順書を整備した。

ER/Studioには、Excelなど他のデスクトップアプリケーションと統合できるオートメーションインターフェイスがある。

「ER/Studioは、Excelと連携して利用しています。ER/StudioにはExcelサンプルマクロがあり、これを参考にして独自のマクロを作成しました。」（田中氏）

ルーチンタスクを自動化することで、システム開発に関与する関係者は、容易にER図の作成ができるようになった。

変更要望の対応スピードが向上

システム開発には保守が欠かせない。カットオーバーしたシステムでも、エンドユーザー部門から変更要望が上がることもあり、開発チーム、管理チームともに、その対応を行う。

そのような場合も、現在はER図が保管されておりデータ構造の可視化がおこなわれているから、個々の変更要望への対応スピードが向上した。

「ER図が必ず作成され、かつ常に最新状態に保たれるようになりました。データ構造の可視化による変更要望の対応スピードが向上しました。」と同社のシステム開発1チームの美馬貴志氏は語った。